

「国民学校 1 年生が体験した戦争体験」

永渕 寛幸さん（昭和 13 年生まれ）

はじめに

戦後 81 年、戦争を知らない人たちが圧倒的多数派になる中、戦争の記憶が消滅の危機に直面している。私は、長崎県生まれ、太平洋戦争開戦前に台湾高雄州岡山郡（現在の台湾高雄市岡山区）に移住。

終戦直前の 7 歳（国民学校 1 年終了）の春に日本（当時「内地」と称されていた）に帰り終戦を

迎えたが、台湾（基隆港）からの引揚げ途中、台湾海峡で乗船した船が魚雷攻撃を受け、大破、漂流し、九死に一生を得た経験がある。

再び戦争の惨禍をなくすためには、その経験が、私的にではなく、組織的な手段により語り継がれていくことが不可欠であると思い、本稿を提出することとした次第である。

近年、第二次大戦後に確立された国連を中心とする国際秩序を無視した大国の横暴がみられるのは、残念でならない。

以下に、国民学校 1 年生が体験した戦中の出来事を記したい。

1 国民学校 1 年生（1944 年 4 月－1945 年 3 月）が体験した戦中のできごと

（1）通学する国民学校の校庭に米軍機（艦載機）が墜落。実物を見る。

パイロットの靴が大きかった記憶あり。パイロットの記憶はなし。

（2）1944 年 10 月中旬、級友の T 君と下校途中、艦載機による機銃掃射を受けた。

二人は頭巾をかぶって道路の左右に伏せたが右側の T 君は即死。

私は左ひじをかすただけで難を逃れた。

左ひじに残った「二」という形の傷跡は、当時の恐怖と、怒りと悲しみ、

そして、T 君を思い出させる。

いま、平和のうちに生きる自分を見ると、T 君のためにも長生きをしなければと思うのである。

8 月はその思いを更に強くさせる月なのである（1968 年 8 月のメモから転記）。

(3) 日本（内地）への帰還途上、乗船した船が魚雷攻撃を受けた。

1945年春に、軍人軍属の家族には内地への帰還命令が出されて、内地へ帰還することになった。

私たち家族(母・姉2人・私・妹・弟)が乗船した船の名前は「生駒山丸」(3,180トン)という輸送船(本来貨物船であるが海軍に徴用されて当時は輸送船として使用されていた)。

1945年3月15日、台湾北部の港、基隆港にて乗船。16日深夜1時出港。

17日深夜1時過ぎ、台湾海峡において生駒山丸に米軍潜水艦の魚雷命中。

第1船倉浸水。後部は無事。船首が海面に突っ込みつつ航行し、大陸沿岸の馬祖島沖で
かくざ
擱座。

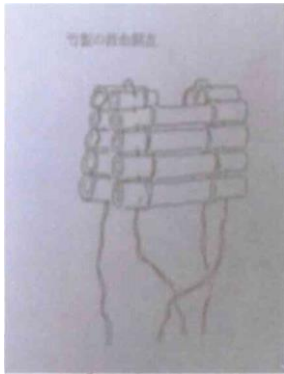
当時の魚雷攻撃から内地帰還までの状況は、当時の小学生時代の記憶によれば次のとおりである。

(ア) 船内の乗船場所は正確に記憶していないが、前方で海面に近い船室

に乗船していたものと思う。夜中に睡眠中、周囲の大声に驚き目を覚まし、^{かいこだな}蚕棚から床に飛び降りたら冷たい海水が膝まで来ていたこと。

(イ) 枕にしていた竹製の救命胴着に首を突っ込んで前後ろに下げて着る。家族と同乗者とともに、デッキに出る。外は寒く風波があり、子供はしゃがんで大人の陰でのぐ。

誰かが、兵隊さんたちが何人も切腹しているという話を聞いたこと。



「生駒山丸」に搭載の救命胴着(出典:別記)

- (ウ) どのくらいたったかは不明だが、病弱だった母と私を除く家族はボートに収容されたこと。私は他の男の子たちと一緒に海面に近いところに連れていかれて、暗闇の中、飛べと命令されて、躊躇^{ちゅうちょ}していると海に放り込まれたこと。
- (エ) 海面浮遊中をジャンク船に救助されて、中国人の家に連れていかれたこと。その家で、大きな丸いおにぎりに「でんぶ(みたいなもの)」をまぶしたものを渡されて、おいしい思いで食べたこと。
- (オ) その後、日本軍の現地守備隊に引き渡され、着衣の名札に書いてある本籍地別に仕分け、名寄せされて、そこで家族と再会したこと。そして、洞窟みたいな兵舎に滞在したこと。シラミやノミに悩まされたこと。
- (カ) その兵舎で連日、機関銃の弾磨きをさせられて、時々手を出せといわれて黒砂糖をもらったこと。
- (キ) ご飯には、砂利が入っており、そのまま食べられずに苦労したこと。炊事場では当番の兵士が食べ残したみんなのご飯を^{ざる}箆に集めて、砂利を取り除いてご飯粒だけにして立ち食いしているのをみて食料が不足していることを知ったこと。
- (ク) 約1か月後の4月14日、ジャカルタから日本(内地)へ向かう病院船「第2氷川丸」に救助され、15日に出発し帰還の途に就いたこと。乗船して航海中に、トイレでは紙を流すなど厳しくいわれたこと。

させばこうひづくしがんべき

- (ケ) 4月17日、佐世保港日尽岸壁に上陸し、即、佐世保海軍病院(現在の佐世保共済病院)に家族全員1か月余入院したが、病院のビルの屋上に登れば、そこでは、傷病兵が同じ傷病の上官からいじめられていた光景が忘れられないこと。

きぐう

- (コ) 6月、母の実家(佐賀県)に寄寓した際には言葉(方言)が理解できなかったこと。戦争体験ではないが、終戦直後の9月に2年生に編入したが、学校では、台湾人といっていじめられたこと。台湾以外の当時の“外地”から引揚げてきた生徒たちも、当時の“蔑称”でいじめられていた。それで、学校に行かなくなり、たまに出席すると、先生からもビンタされたり、職員室の前に立たされたりと酷い扱いを受けたことも記憶に残っている。

- 2 戦後の中学生時代(1950-53)には、弁論大会などでよく「引揚げの思い出」というタイトルでの発表があり、私も上述のようなことを話したことがある。同級生たちからは、引揚げ時の過酷な苦労話を聞かされたことも記憶に残っている。

台湾以外の戦争経験者(激戦地の従軍兵士)からの話を聞く

- 1 2004年からパラオ共和国政府国務省に2年間勤務したことがあるが、滞在中にパラオのアンガウル島での日米の戦闘(注3)について、当時の激戦の生き残りの元日本兵倉田洋二氏(海洋生物学者で当時パラオ・コロール州に在住)から、自らの体験を現地アンガウル島に同行して激戦当時の話を聞くことができた。

アンガウル島は、ペリリュウ島の10km南西にある小さな島(行政単位では16州の一つ「アンガウル州」、2004年当時は人口500人程度の島)である。

島には多くの墓標(碑)があるが、当時の激戦地は現在ジャングル化して、その下には多くの兵士が今もお眠っているという。掘り起こして遺骨を収集することは極めて困難、そっとこの地で眠らせてあげたいとお話が今も脳裏にある。

この戦闘での生存者は、日本軍では2名(倉田氏と渋谷区在住のF氏)だけということであった(生存者2名というのは、お話を伺った時点のことかもしれない)。

さんごう

アンガウル島に残る戦闘の残骸や塹壕、遺族が建立した墓標等の写真添付。

(注3) アンガウル島での日米の戦闘とは、1944年9月17日～10月19日の間に、島内で展開された戦いで、日本軍（宇都宮歩兵第59連隊1250人）と米軍（81歩兵師団21000人）との間で行われた戦いである。

2 パラオでの日米の戦闘は、1944年秋のパラオのペリリュウ島とアンガウル島の2島で主に行われたが、ペリリュウ島の玉砕戦は、天皇陛下ご夫妻が慰霊に出かけられたり、最近アニメ映画としても紹介されているので、良く知られていると思う。

私も滞在中に出かけたことがあるが、単なる視察であり当事者から聞いていないので、記載は省略する。

ただ、同島には、日米双方の慰霊碑が建立されている。

2015年4月、現在の上皇ご夫妻（当時の両陛下）が慰霊訪問された際には、上皇

ご夫妻がアンガウル島に向かって こうべ 頭 を垂れるのを倉田氏は

約1200人の戦死者の名簿を抱えて両陛下の側で見守っておられた。

その姿を衛星中継で拝見したことは、記憶に新しい。

車椅子姿を拝見して高齢ながらお元気なのだと思ったところである。

なお、倉田氏は2019年11月92歳で亡くなられている。



アンガウル島戦争の残骸と日本軍の塹壕(2005. 10. 6 筆者撮影 以下同じ)



島に設置されている墓標（左上）と血に染まったという Bloody Beach（右上）

アンガウル島（下）





アンガウル島から北方 10km にあるペリリュウ島を望む

3 あとがき

- (1) 上記 1 (5) については、日本(当時の内地)の帝国大学に進学するために海軍委託学生として生駒山丸に同乗していた台北高校卒業生 49 名による以下の記録がある。

「台湾海峡の波高き春に一昭和 20 年台北高校卒業生 49 名
生駒山丸・遭難 日本内地上陸までの記録一」

[書誌情報] 責任表示: 片瀬潜 [ほか] 共編出版者: [片瀬潜]

出版年月日: 1993. 3

請求記号: GB554-G306 書誌 ID: 000002495686 (国会図書館)

[書誌情報] 責任表示: 片瀬潜 [ほか] 共編出版者: [片瀬潜]

出版年月日: 1993. 3

請求記号: GB554-G306 書誌 ID: 000002495686 (国会図書館)

- (2) 上記 1 (5) の記述に関しては、(イ)に掲載の救命胴着のほか、生駒山丸の遭難地点、空爆による沈没、帰国までの日時、帰国地佐世保の上陸した岸壁の名称等は、上記書籍からの引用である。引用に当たっては、同書の「まえがき一第 2 版発行にあたって」に以下の文章があり、執筆者の承諾は得ていない(当時国民学校の低学年のため、当方の記憶にあるのは、1945 年 3 月 15 日基隆到着の日、乗船した船名(生駒山丸、第 2 氷川丸)、遭難時及び守備隊での記憶、4 月 17 日佐世保上陸の日、佐世保海軍病院等、限定的である)。

「我々がまとめた記録は、一緒に遭難した者すべての、それぞれの人生の貴重な記録として役立ててもらおうことが、その目的の一つでもあると考えている…」

- (3) 乗船した生駒山丸は、魚雷攻撃を受け、大陸沿岸の馬祖島沖で^{かくざ}擱座中のところを、数日後、空爆により沈没している。

以上

令和8年5月27日 寄稿